

【博士学位請求論文 要旨】

熟達の柔道整復師に関する質的研究 ～熟達の柔道整復師の語りから

10SK1003 稲川郁子

序章・第1章 本研究の課題と視座

本研究のリサーチ・クエスチョンは、熟達の柔道整復師 expert judo therapists はどのような過程を経て熟達に至り、何を以て熟達であるのかというものである。

柔道整復師は日本の国家資格であり、骨折・脱臼・打撲・捻挫などの運動器の損傷を回復させる職業として国民医療の一端を担ってきた。しかし現在、様々な背景により、接骨師、ほねつぎの異名を持つ柔道整復師が骨を接ぐ機会は激減している。そのため、柔道整復師の徒手整復技術をはじめとする膨大な英知の伝承は困難となり、「骨の接げないほねつぎ」が急増する事態となっている。養成学校で教えられる形式知のみで専門性が獲得されるわけではなく、多くの初学者は、徒弟制により暗黙知を中心とした実践的な知を獲得してきた。柔道整復師の中でも、とりわけ達人は、直感に基づき骨を接いでいる。この直感の中に骨接ぎの技の真髄が存在すると考えられるが、「ゴッドハンド」たちは高齢化しつつある。彼らの技を医療技術としての側面だけでなく、口伝や口承を重視しつつ、さらにハビトウスや生活史を、種々の質的手法を用いて文化的側面からも伝承しておく必要がある。

第2章 本研究の対象と方法

本研究では、牧内與吉氏と門井伸夫氏を研究対象者に選定した。彼らを熟達の柔道整復師とする根拠は、数十名の弟子を育成し、また整形外科医の信頼を得て活動していた確かな時期が存在し、ある地域にほねつぎとして重大な貢献をしてきたことが明白という点である。そのため、彼らの語りは特殊かつ一回起性を持つと判断する。本研究では、熟達の柔道整復師のライフストーリー法を中心とした質的方法を採用し、語り narrative を通じた熟達の柔道整復師の理解を試みる。ライフストーリー研究は、語りそのものを記述し、対象者から調査者へ向けて発せられる「語りの意味」を探求し、個人によって語られる歴史というよりも、その場で調査者とともに築き上げた物語という視点を重視する。また、本研究は、解釈的現象学の立場をとる側面があるが、解釈的現象学とは、現象の内容を体験された通りに「生きられた体験 lived experience」として、あるがままに記述すること自体が研究目的とされる。質的研究を行う場合、厚い記述 thick description という概念

が重視されるが、本研究は、2名の熟達の柔道整復師の「生きられた体験」について、厚い記述を通して理解していく試みである。

第3章 神様が与えてくれた仕事 ～牧内與吉氏

牧内與吉氏は、1959（昭和 34）年、東京都練馬区で牧内整骨院を開業した。以来五十余年の間に育てた弟子は約 80 名を数える。牧内氏のキャッチフレーズとして「三度の飯より顴上が好き」というものがある。顴上とは、治療に熟練を要す上腕骨顴上骨折のことを指す。そのような言葉が敷衍するほど牧内氏の骨接ぎの技には定評があった。牧内氏は、若き日に自衛隊の医務室に配属されたことで医学に興味を持ち、誠実な人柄が縁を呼び、柔道整復師の道に入り、そして金井良太郎氏と栗原宏介氏と出会い、師と仰ぎ、謙虚にほねつぎとしての技を磨いた。その技は多くの修羅場を経て熟達へと至った。やがて、その技と人に、柔道整復師を志す多くの者たちが集まり、教えを仰ぐようになった。牧内氏は弟子の育成を「ほねつぎの樽に漬ける」と形容する。特に住み込みで育った弟子たちは、牧内氏の背中を見て一人前に育っていった。現在、牧内整骨院においても骨折や脱臼など骨接ぎを必要とする患者はかなり減少しているという。しかし患者の痛みを取ることに妥協しないその背中が、今もなお弟子たちに「ほねつぎ職人であれ」と語る。牧内氏の歩みにおける独自にして重要な点は、牧内氏がその豊かな臨床を経験のみに基づいて展開していたのではないということである。牧内氏は、臨床に立ち続ける一方で研究する柔道整復師としての姿勢を弟子に示した。一門から学術的に指導的な立場にある者も複数輩出している。牧内氏は、柔道整復師界で初めて発足した学会である日本柔道整復接骨医学会の初代会長を務め、教科書の執筆を手がけるなど、柔道整復師が研究を行うための基盤も整備した。

牧内氏の語る「戦争物語」は、壮絶ではあるがどこか人情話を思わせるユーモアがある。語られる内容や語り口から、牧内氏が、患部ではなく患者を診ていたのだと気づかされる。このほねつぎの巨人が、ほねつぎの仕事そのものに謙虚と感謝を貫き続けていることは、その技と功績と並んで語り継がれるべきことである。

第4章 ほねつぎは武器を持たない武士 ～門井伸夫氏

門井伸夫氏は、栗原宏介医師に、のちに柔道整復師の「虎の穴」となる整形外科の開業を決意させた人物である。医学部の講師を務めていた栗原氏は、地域で開業するためには、

患者を手術に頼らず治癒に導く保存療法の技術が不可欠であると考えていた。その折に門井氏の骨接ぎの技にふれ、その高度な技術に瞠目したことが開業の契機だったという。門井氏は、栗原整形外科における骨接ぎの基礎を築き上げたほか、沖縄県で最初の整形外科病院が開院する際の基盤を作り上げた。そして1971（昭和46）年、埼玉県富士見市で門井整骨院を開業し、ここでも20名を超える弟子を育てた。開業から40年目となる2011（平成23）年、門井氏は惜しまれつつ76歳で亡くなった。門井氏が熟達へと至る過程と、特に栗原氏との医接連携の軌跡をたどることは、医接連携の在り方を考察する好例になりうる。門井氏の歩みの独自の点は、門井氏のあこがれの対象が柔道整復師ではなく医師であったという点であろう。門井氏はほねつぎとして、栗原氏の片腕として活躍した。自らの接骨院を構えた後も栗原氏を敬い、慕い続けた。正統的周辺参加論では、最終的な具体的到達点を「ああいう人（たち）になる」、学習の動機を「ああいう人（たち）になりたい」という願望として捉える。自分にも患者にも厳しく、常に学び続け、正確に患者を治癒に導く栗原氏の技と姿勢は、門井氏にとってあこがれであった。また、栗原氏も門井氏の骨接ぎの技と人を信頼し、診療からなるべくメスを排除するという理念の実現に向けて邁進した。この医師と柔道整復師の双翼は、それぞれのふさわしい能力を以て応答する責任を果たし、多くの患者を救ってきた。栗原氏と門井氏の関係は、お互いの領分をわきまえ、それぞれの職能への尊敬を基盤としながら補完し合う理想的な医接連携の姿であった。門井氏は弟子たちに「使命感を持って、命がけで、燃えてやれ」と伝え続けた。謙虚に直感を磨き続けたほねつぎの生き様は、弟子たちと栗原整形外科の後進へと受け継がれている。

第5章 熟達の柔道整復師の理解

本章では正統的周辺参加論、ケアリング論に依拠しながら熟達の柔道整復師の理解を試み、牧内氏と門井氏をそれぞれ熟達の柔道整復師たらしめているものについて考察した。キーワードとして、熟練のほねつぎアイデンティティ、ハビトゥス、ふさわしい能力と応答する責任、反省的实践家等が挙げられる。

まず、牧内氏も門井氏も、熟達の医師の存在する恵まれた環境で理想的な医接連携を実現し、正統的周辺参加によって技術と知識を身につけた。そこで多くの骨接ぎを経験し、時に修羅場に直面することで、何を善きものとするのか、ほねつぎとしてのハビトゥスも形成されていった。やがてほねつぎとしての揺るぎないアイデンティティが醸成され、やがてそれは熟達のアイデンティティとなって両氏の根幹を形成していった。自分が熟達の

柔道整復師であるという自覚は、どのような状況にも柔道整復師としてふさわしい能力を以て臨むための研鑽につながった。そして実際に修羅場に直面した時には、逃げることなく応答する責任を果たした。技術、知識だけではなく、臨床に立つその姿勢から、弟子たちは多くの学びを授けられた。牧内氏と門井氏の歩みは、このようなサイクルの中に生じたものである。牧内氏や門井氏に匹敵するレベルの熟達の柔道整復師は、今後出現しないおそれもある。そのような状況で、彼らが熟達に至る過程や職業観、越えてきた修羅場の経験を記述することは、今後の柔道整復師が進むべき手がかりを示す可能性がある。骨接ぎを中核としつつ、患者の痛みを取ることに謙虚に向き合い続けたその姿勢は、あらゆる柔道整復師の指針となるものと考えられる。

終章

本研究の結論は以下のとおりである。

第一に、熟達の柔道整復師は、徹底したほねつぎの修行を経験していた。この時期に、心から尊敬できる師に揺らぐことなく師事し、長期間にわたり多くの薫陶を受けていた。第二に、熟達の柔道整復師は、多彩な臨床経験、とりわけ多くの修羅場を克服した経験を持っていた。第三に、熟達の柔道整復師は、強烈なほねつぎとしてのアイデンティティを持っていた。その一部には職業に対する謙虚と感謝が含まれていた。

本研究では、牧内氏と門井氏の歩みの一部をまとめた。その語りの豊かさや経験の多彩さを記述できたことは大きな成果であった。また、先行研究による一定の枠組みを与えることで、彼らの歩みを解釈し直すことが可能となったといえる。熟達の柔道整復師がなぜ熟達に至ったのかという問いに対し、従来考えられてきたのは「柔道整復師がほねつぎとして存在できた古き良き時代に、彼らは、人より多くの症例を経験し、人より多く学んだのであろう」という漠然としたものであった。しかし本研究によって、社会学的観点から、彼らが職業に出会い、決定的な人物と出会い師と仰ぎ、苦悩し成長した過程を記述することができた。ライフストーリー法を用い彼らの歩みを残すことは、ほねつぎの巨人の「生きられた体験」の記録として意義深いことであると考えられた。